

令和三年九月吉日初版作成

己の魂の光を強める

高嶋善三郎

目次

- 運を高める・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 己の魂の光を強める・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 釈尊・イエス・老子の真実・・・・・・・・・・・・ 4
- 世界平和の祈りの道・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 人生の明暗の分岐点・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 自分自身の意識を変えるのは、自分自身・・・・・・・・ 7
- 自分自身の意識を常に反省し靈化しておく・・・・・・・・ 9

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

(スマホ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

運を高める

アメリカのメジャーリーグで活躍する大谷祥平選手は、投打の二刀流で、ホームラン数や投手としての勝ち数においてもトップを争うことで、アメリカ球界で、今や大変な注目を浴びている選手です。アメリカの野球ファンの寵児だけでなく、ライバルチームである他の選手からも、尊敬の念を持って迎えられるています。

百九十センチを超える身長で、投打の技術があることは言うまでもないが、いつも笑顔で、何気ないファンサービスや他の選手とのふれあいで、皆から愛されているようです。

何故このように、皆から愛されるのかというと、彼の高校生時代から球界で活躍する夢を実現するため、毎日自分の行動の反省点を日記につけ、運を高めることに取り組んできた。そのなかで野球の道具を大切に使ったり、試合の審判に礼儀正しい態度をとったりするだけでなく、こみ拾いや部屋掃除をしていたということです。その掃除等を通して「気づき」や「感謝」が、自分を本当に強くすることを実感したということです。

私の学生時代、安岡正篤先生の講演を拝聴したことがありました。この先生は、日本を代表する哲学者で特に陽明学者として有名なかたです。その講演の中で、国が繁栄するにはどのようにしなければならぬかをテーマに長年研究してきたとのことで、その結論として、国民一人一人が徳を積むことだという結論を得たという内容でした。安岡先生はまた易学でも有名で、個人の運命を占うことでも知られていました。運命学上、運の良い人は、過去世で徳を積んだということでしょう。

己の魂の光を強める

五井先生も、今生で恵まれた環境、即ち美貌や才能や財に恵まれている人は、過去世で徳を積んだ人だと言われています。

しかし、過去世の徳というものはいつか消えるのだとも言われています。そして消えることが無い徳は、己の魂の光を強めることだ。(『続如是我聞』189)

そして消えることが無い徳、真実の功德というものは、本心開発の道を進むことによりつてのみ得られるのであり、その道は一度空の境地を通過しないと得られない道なのだ。

……空即色といひ、必ずかへ聞かせるが、させて頂へ、やらせて頂へ、という謙虚な布施行為はすでに、空即是色の空から発した思いであつて、そのまま眞実の功德への道であると説明されています。

『宗教問答』問へのから要点要約)

また五井先生著『眞の幸福』では、次のように解説されています。

己の魂の光を強めることは、同著では、人間が眞の幸福をつかむという言葉に言い換えて、永遠の生命を悟ることと、神との一体感を得ることなのである。

人間の实体は微妙な光明波動の神霊の世界であつて、この肉体身は、物質の地球世界を進化させるために、それに合わせて現われている仮の姿にすぎない。自分は神霊の世界に住んでいるものであるとわかること、肉体界の生老病死の苦悩はたちまちのうちに消滅してしまい、眞の幸福をつかむことが出来るのである。その為に古代から幾多聖賢者とその眞理をいろいろの角度から説いたのである。

しかし今日までは、自分たちの欠点を直してからでなければダメであったり、清らかな心境になつていなければ、神に祈れぬといひつゝいな

つていて、神様に近づくのがなかなかむずかしかったのである。

自分の欠点を直して身体の、浄まつてから神様に祈るのでは、大半の人が神様に近づくことはできない。五井先生の説いているのは、人間は本来神の分生命(わけいのち)で、浄らかなものなので、肉体人間として、物質世界に住みついてから、物質世界に自己を合わせて生活する為、無限とか自由という、神の生命本来の生き方を忘れてしまつて、肉体人間という小さな自己に陥つてしまつたのである。その為、神様からきている無限供給というものから次第に小さな有限になつてしまつて、自他の差別がいちじるしくなり、お互いが幸福の奪い合いというふうなことになるまでしまつたのである。

釈尊・イエス・老子の眞実

また同著の中で、釈尊やイエスや老子の、私たちを導いて下さつた、それぞれの方法を比較しながら、解説されています。この解説は、私たちが、正しく眞理を体得していく上において、極めて参考になることが言及されています。それを見てみましょう。

釈尊は、金星の光明によって自己の本体と合体し、本体がそのまま仏としてこの世の指導にあたったのである。その時からの釈尊は、神靈であって、肉体身でなくなっていたので、生老病死の苦悩は消滅していた。そこで、釈尊は、ご自分の悟った道を人々に知らせ、生老病死の苦悩、この世の苦しみを超えさせようと、仏教をひらかれた。生老病死の苦悩をこえるためには、どうしても自己が靈身であることを悟らなければならぬ。仏教の各聖者はその悟りの道を、それぞれの角度で教え導いてこられた。

イエスは、釈尊と違って、人間の生老病死の苦しみを見かねて出家したというような生き方ではなく、人類救済の天使として地球界に派遣された、というのがその生涯の言動や運命に、はっきり現れている。イエスにとっては、その天命上、個人個人のその時代における肉体界の生老病死の問題を、一人一人の悟りによって、解決させてゆこう、というような釈尊のような方法はとっていない。イエスが病氣や災難を救って歩いたのは、当時救世主を求めていた人々の心に合わせて、神の栄光を現わし、神の偉大さを人々に知らせるためであり、終局の目的は、人々がひたすらに神の国の正しい行ないに入っていくように、神を求め続けて

ゆくことを実行させることにあった。イエスは、肉体人間の幸せというより、魂の救済を主にして天下ってきたのであり、後々の人類世界の神の国、昇格を願ってきたのである。

したがって、教えることも個人的な肉体生活の幸せへの方法ではなくて、人類社会のためになる生き方が主になっていた。

イエスの神の国の義（ただ）しきを求めるといふ生き方は、實際は釈尊の本心開発と同じことなのであるが、神というのは、外にあるような気がして、神を外に求めたりする誤りをおかしがちである。神というのは、神社仏閣に祭られようともその神社を詣でることは、あくまでその人の本心開発のためになることであり、外なる神が、内にはってくることではなく、祈るその人の本心が開かれてゆくことなのである。

また、老子は、この宇宙は一つの意志、すなわち大生命の絶対智によって、動かされているので、地球もそして地球人類も、その力によって活動している。それ故人間は大生命に分生命として、小生命とよばれている。この分生命の小生命の存在は、大生命である神のみ心のままに働いているのであり、神をはなれた肉体人間としての想いを出せば、それだけ完全性がかけてゆく。そこで老子は、大生命の動きのまま、神のみ

心のままに無為にして動け、と言われたのである。

人間の肉体身の想念行為は、神にまかせきった時、いわゆる無為になった時、神のみ心そのままの力を発揮するのであり、その人は肉体人間観の人とは比べものならぬほどの智慧能力を発揮し、神通自在の人間になると、「ご自分（五井先生）」の体験を通して解説されています。

世界平和の祈りの道

さらに同著では、今生の運命は過去世における想念行為が、今生の運命として現れているので、生老病死の苦悩も過去世の引きつづきとして、味あっているわけで、あくまで肉体人間を主としての現れである。それゆえ肉体人間観を脱け出さなければ、生老病死の苦悩を超えることができない。それを力まず、無理なく、特別の修行もなくて超えてゆける道が祈りなのであり、その祈りが個人人類同時成道の道として、世界平和の祈りが生まれいでているのである。

守護の神霊に感謝しながら、この祈りを続けていると、いつの間にか肉体を主にした宇宙観から、神や大宇宙を主にした生命体としての人間観に、自分も気づかないうちに変化してしまうのである。祈りというの

は分生命である人間と、大生命である神との交流を続ける方法なのであり、大生命の光明波動が、分生命である人間の業想念を浄め去って下さる慈愛の道なのであると解説されています。

そして、現世の利益について、次のように言及されています。

宗教の信仰によって、現世利益を与えられることが多々ある。それはそれで結構であるが、宗教信仰はやはり本心開発が主になるものであり、本心の開発にしたがって、社会や人類の為に、自ずと貢献してゆく生き方になってくる。それゆえ、自分達の現世利益の願いだけで、神社仏閣や教団参りをしていたのでは、その人々は地球滅亡を防ぐなんの力も出していないことになる。そのことは、現世利益だけではついには、自己を滅ぼしてしまうことになる。

釈尊にしてもイエスにしても、また、他の聖者賢者にしても皆その真理を教えていたので、現世利益だけの教えをしている人はいなかったのである。現世利益は、あくまでも本心開発の道の、途上で与えられるものなのであると注意されています。

人生の明暗の分岐点

さて、以上のことを別の角度から、昌美先生の著の『真理―苦悩の終焉』に基づき、見てみましょう。

持ち越し苦勞や取り越し苦勞という言葉があるが、この言葉の意味するところは、過ぎてしまったことにあーしておけばよかったと悔やんだり、どうなるかわからない将来のことをあれこれ考えて無駄な心配をすることであるが、これらの苦勞はどうして起きるのか。

それは肉体そのものも物質であり、肉体に把われ、三次元世界での物質所有者の生き方を捨てきれず、即ち物質がすべてと思い込んでおり、物質に把われているからで、物質を人より自分のほかに、出来るだけ多く取ろうとするその欲望があるから、苦悩が絶えないのだ。

物質重点主義から、精神尊重主義に意識を変えれば、持ち越し苦勞や取り越し苦勞から自由になるのであると解説されています。

また、愛の現わし方に勘違いをしていると、注意されています。

人は、当の本人自身の苦しみだけでも十分であるのに、家族や友人など自分の周りの苦しみまで背負い込んで苦しんでいる。感情移入によって共に苦しみ、共に喜び、共に分かち合うべきと勘違いしているが、真

理は決してそうではない。感情移入した分だけ、自分の生命エネルギーを無駄遣いしているのだ。周りの苦しみから自分を切り離すことができたら、自分の新鮮な、迷いのない生命力溢れたエネルギーが愛の心となって、癒しの心となって向けられ、いつまでも解決のめどのつかなくなった苦しみに別れを告げ、もう永遠に、苦しみ、悩みに追いつまれないことがなくなり、その瞬間から真理への目覚めが始まり、それ以上苦しまなくても済むようになる。

真理に目覚めていない人は、なんでもかでも自分の悩みや苦しみにて受け止めてしまいが、真理に目覚めた人は、何もかも喜びとして受け止めてゆくのである。そこに人生の明暗の分岐点がある。

なぜ喜びとして受け止めることが出来るのか、それはいつも必ず自分の心身と神と一体化しようとしているからである。無限なる愛、無限なる喜び、無限なる能力、無限ある幸せにならんとして努め、自分の肉体を神の光輝く器にしようとする喜びに溢れているからである。昌美先生は、解説されています。

自分自身の意識を変えるのは、自分自身

五井先生、昌美先生のお言葉から、真の功德を積むことの、真理やその方法を理解することができたが、そのほか、私たちが誤りやすい点など、知ることもできました。それについて改めて整理してみましよう。

まず第一に、**神というのは、外にあるような気がして、神を外に求めたりする誤りをおかしがちな点**について

私たちは、パワースポットという言葉に心を奪われます。そこに行けば、何がしかのパワーを得られるのではないかと期待するからでしょう。

私の体験からすると、五井先生のご存命中、先生がおられた聖ヶ丘道場によく通ったものです。すべての心の汚れが浄められたことを記憶しています。今から思いますと、五井先生の慈悲の偉大さを思い知らされます。五井先生がご帰神されてから自分自身を見つめたとき、五井先生にいかに依存していたか、自分自身の靈性開発を怠っていたかを痛感したものです。とはいうものの、当時の体験が今の私の靈性開発の原動力になっています。

靈性開発の原点は、まず五井先生、昌美先生の示された真理を正しく理解することです。

そして、自分自身の意識を肉体中心の生き方から、霊体中心の生き方

に変えることによります。

この自分自身の意識を変えるのは、自分自身でやる以外にないのです。それを端的に示されている五井先生のお言葉をみてみましょう。

『続如是我聞』319に次のように示されています。

或る人から「凡夫易行実践五ヶ条を教えてください」といつてきた。

五井先生は次のように五ヶ条をおあげになった。

一、 肉体の自分では何事も為し得ないのだ。と徹底的に知ること
(これがほんとうにわかったら悟ったと同じだがね、と先生はおっしゃった)

二、 なんて自分はだめなんだろう、と思ったら、すぐそれは過去世の因縁の消えてゆく姿と思い、世界平和を祈ること。

三、 たゆみなくつねに祈ること。

四、 何事も自分がやるのではなく、神さまがやってくさるのだと思
いこす。

五、 朝起きたら祈り、夜ねる前、少し時間をかけて祈れ、そうすると、自然に臍下丹田に息がおさまる。

臍下丹田の重要性について、昌美先生からも、「赤ちゃんが母の子宮で成長している時、へその緒はお母さんのへそにつながっている。宇宙子はそのつながりを通して赤ちゃんの体内に流れ、私たちが成長して大人になった後も、私たちはへそを通して魂の親である宇宙神とつながっている。宇宙子は見えないへその緒を通して肉体に入っている事実を知ること」と指摘されています。(『呼吸法の唱名を最大限に活用する』)

つまり自然に臍下丹田に息がおさまるとは、神聖につながったということなのです。肉体中心の生き方によって見失っていた、神聖を取り戻したということ。即ち思考(頭で考えること)と感覚(心で感じること)が一つに融合して、自分の行動すべてを喜びとして受け止めることが出来るようになったということなのです。

自分自身の意識を常に反省し霊化していく

次に、愛の行為を感情移入によって共に苦しみ、共に喜び、共に分かち合うべきと勸導しているように思います。

愛の行為として共に苦しみ、共に喜び、共に分かち合うことは、決して間違っていないと思います。確かに五井先生も「消えてゆく姿」という真理

の言葉を自分以外の人に使うとき、まずその人の心に寄り添うことが大切であると注意されています。

しかし相手の人の心のなかに入りすぎると、即ち感情移入してしまうと、自分を取次としての神の光は入りにくくなるのです。私の体験からもそのように実感しています。

また、五井先生著の『神様にまかせきる』の内容の中に次のような言葉があります。

皆さんも世界平和の祈りを毎日重ねてやっていると、知らないうちに霊化していった、神様の心がすべわかる、あるいは知らなくとも神様のみ心の中へ入ってゆくんのです。たとえば自動車が来ても、フッとよけてしまつとか、禍を自然に避けられるような動きになってくるのです。その一番の達人が植芝盛平先生です。この前、高橋君が聞いてきました、白光誌にも出ますけど、

「私は相手の目を見ない。なぜなら見ると相手に吸収されてしまつから。私は相手の神体を見ない。神体に想いがとられるから。私は相手の剣を見ない。見るとその中に吸収されてしまつから」といっています。では何をしているというのかといつても、

「私は相手を見ない。ただうしろをむいて立っているだけだ。相手が私の中にみんな吸収されてしまうんだ」といふんです。

大変な、すごい言葉ですよ。それを実際にやっているでしょ。相手がエイッとやっただけで、相手がすっ飛んでしまう。なんのことはない。それは何故かという、自分の中にみんな同化してしまうからです。

敵なんかいないですよ。自分の中にすべてが入ってしまうんです。向うは相手とみてやってくるでしょ。ところが、こっちが大きくなって宇宙大に広がってしまうわけなんです。広がってしまう、ということは問題にならないというわけですよ。けし粒がいくらぶつかってきただってなんでもないでしょ。あなたにホコリの小さい一つがぶつかってきたって、なんでもないでしょ。ホコリがついて倒れちゃう人はいないです。それと同じことです。

いくら押したって、突いたって、なんにもならない。片方は宇宙大に広がっちゃっているから、みんな吸収しちゃうわけです。そして天地一体になって、宇宙一杯に広がっちゃうわけですから。

宇宙一杯に広がっているというのは、想いが無い、ということなんです。この世は相対的ですよ。陰陽に分かれて相対的です。この地球界はその相対がさらに細かい相対に分かれたわけです。それが元の相対、イ

ザナギ、イザナミの昔に還ると二つだけです。それをもっと昔に還れば大神様一つになるでしょ。それと同じように、地球界において要するに絶対者になれるわけです。

それは全部想いをなくしてしまう。空になってしまう。神様の中に入れてしまうということです。・・・

私たちの体験は、このような偉大なるものではありませんが、自分の意識を常に神様の方に向け(感謝し)、一体になろうとじていたほうが、相手の人の苦しみは浄められることを実感しています。そのためにも、日頃から神聖復活の印や自分のチャクラを活性化して宇宙神と一つになる呼吸法等により、自分自身の意識を常に反省し、霊化しておくことが大切なのです。ここでいう反省とは、自分自身以外の他の人の苦悩や怒りや悲しみなどの感情も擲んでも、即、手放すことが出来ているかどうかということですよ。これは難しいと思われる方もおられることですよ。が、意外と容易くできるといえます。心の中、あるいは声を出して「私は、他の人の苦悩や怒りや悲しみなどの感情を手放します」と三回言えることです。そうすると、宇宙神の光を感じ、様々な感情想念は消えて去ってゆきます。言語の偉力を知るべきでしょう。